
使い物になるなら・・・。

若宮ひよこ?

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使い物になるなら・・・。

【Zコード】

Z9254P

【作者名】

若宮ひよこ?

【あらすじ】

人見知りで弱虫な橋本空乃が送る日々は、とてつもなく残酷なものだった。

そんな空乃の運命は転校生の青田 鈴谷によって変えられるが・・・?

「使い物になるなら、どんなことをされたっていい。それであなたの気が済むなら構わない。」

私は今田も「誰かのため」に生きていた。

「誰か」というのは好きな人のためでも、家族のためでもない。私がいることによつて、少しあは気が済む誰かのことだ。

それは私がまだ、中学校に上がつたばかりの頃。

「ちょっとー空乃、私のキー・ホルダー盗んだでしょ？」

そう言つて、突然、私のかかとを踏みつける野山さん。

「違ひつ・・・・！それは長谷田さんが・・・・！」

「・・・・知つてるわよ。」

「え・・・・？」

その瞬間私は、私の中にある、周りからの印象といつもいのを悟つた。

私はお人よしで、人見知りで、たぶんクラスの中で一番弱いんだ。自分より立場が上の人に嫌なことをされた人たちは、自分より立場が下の人たちを探してはハツ当たりをする。

そしてその人たち満足し、これから先もそやつて生き続ける。弱い者がいることで、この世界は上手いように成り立つている。そう、私は世界を陰で支える柱になつてゐるんだ。

私は元々、小学校の頃から友達がいなかつた。

欲しいと思ったこともあつた。でも勇気がなかつた。

気付けばグループというものができていた。

私はその輪の中には入れなかつた。

声をかけてくれる者もいなかつた。

みんな、みんなが自分のことで精一杯だつたから・・・。中学校へ上がつてもをかけられることもなく、私は一人のままだつた。

私は一人っ子で、家へ帰つても親は仕事で帰宅が遅く、家族に自分のことを話す暇もなかつた。

誰にも相手にされていない。
誰も私を必要としていない。

そう思つていただけど違つた。

あの時、野山さんが言つてた。

「あんたは使い物になるよ。権力が一番弱いんだから。あんたのお陰であたしがこうしてここにいられる。」

「そうですか。それはよかったです。お役に立てて。」

そう言つて笑つて見せたけど、本当はすごく切なかつた。

何度も不登校になろうと考えたことがあつた。

でも、一生懸命働いている親を、何も知らない親を巻き込むわけにはいかない。

話すつもりもない。何があつても・・・。

私の隣の席は野山さん。

野山さんが自ら、田が悪いからと言つてわざと指摘した席だ。

私は野山さんの言つことをひたすら聞いた。

野山さんが消しゴムを忘れた時はカッターで半分にして貸してあげた。

野山さんが宿題を忘れた時は私の宿題を渡し、変わりに私が忘れた

ということにしてあげた。

私の成績表は無残だつた。

私の後ろの席は墨田さん。

墨田さんはいつも機嫌が悪かつた。

吸い終わつた煙草を、私の首に擦りつけて消してくる。

私の首元は、ボロボロに傷ついていた。私はそれを、長いおくれ毛で隠していた。

いつも私はびくびくしていた。

墨田さんが何でそんなに機嫌が悪いのかは分らなかつた。

常に、私の周りでは私を頼りにしている人がいた。

それも、全て、自分の利益のために・・・。

ガラツ

力強く、ドアが開いたと思うと、見知らぬ顔の男が入つてきた。

先生も後ろからついてきて、黒板にチョークで名前を書き始めた。

「転校生の青田 鈴谷君です。みなさん、仲良くしてあげてくださいね。」

青田さんは休み時間になるたびに、女子に囲まれていた。

「ねえねえ、鈴谷君つてどこから来たの？？」

「鈴谷君つて、彼女いる？？」

「・・・。」

彼は何を聞かれても無言だつた。

彼は校則を完璧に無視していた。

私は何とも思わなかつた。

ただ、自分よりは立場が上の人間なんだなと感じていた。

「あつ、えつと・・・ごめんなさい！！」

掃除用具の後片付けをしていて、長いモップを持っていたので、思わず後ろを歩いていた誰かにモップの先をぶつけてしまった。

「橋本 空乃、お前強いな。」

「え？」

後ろを振り向くと、転校生の青田 鈴谷君が立っていた。

「俺だつたら、とっくに自殺してる。はははっ。」

「あの、痛かつたですか？何をしたら許してくれるでしょうか？」

彼は、顔を近づけて言った。

「俺は誰も信じられない。ずっと親友だと思っていた友達に裏切られたんだ。だから俺は弱い人間なんだ。」

私は何も言うことができなかつた。

そんな過去があつたなんて・・・。

と、するといつもの通学電車の中にいるあの人たちもみんな、一人一人が誰にも言えない事情を抱えて生きているのかも知れない。私は、彼をちゃんと見つめることができなかつたけど、彼は私の目を真つすぐに見つめていた。

「俺はお前の考え方がちつとも理解できないけどな。嫌なら嫌って言えばいいのに。」

「だから・・・私を必要としている人がいるから、私はそれに答えているだけです。」

「・・・馬鹿だ。」

「はい。馬鹿です。」

「そつか。馬鹿か。」

彼がクスリと笑つた。

私はその瞬間、つかの間の幸せを感じた。こうして、誰かと話していること。

当たり前のこと。

それがとてもなく嬉しい。

友達がいるつてこんなにすてきなもの・・・??

彼は、ポンと私の頭を叩いて言った。

「俺が何とかしてやるから。」

翌日、教室に入つてとてつもない光景を見てしまった。
クラスメイトがみんな、泣いている。

先生までもが泣いている。

「ううっ・・・。ウチのせいで鈴谷君が・・・。」

「違うよおっあたしのせいだよおー鈴谷くん、ごめんねえ・・・
先生が、私に気付いたのか、啜り泣きながら一枚の紙をよこした。
「これ、青田君の自殺の原因なの。」

「じつ・・・自殺!?」

急いで紙に目を通す。

メモのような薄い紙にたつた三行文字が書かれていただけなのが
ぐに読めた。

紙には、こう書いてあつた。

「みんなが橋本 空乃さんをいじめているようなので、みんながこ
のままいじめ続けるなんなら俺、死ぬことにします。」

それからというもの、私は何一つ不満のない毎日を過ぎしていた。
しかし、幸せを手に入れたと同時に、大切なものを失つてしまつた
気がした・・・。

みんなはもつと、もつと、大切なものを失つてしまつたはずだ。

「使い物になるなら、どんなことをされたつていい。それであなた
の気が済むなら構わない。」

そんな言葉、この世界に必要ない・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9254p/>

使い物になるなら・・・。

2011年1月9日01時17分発行